

# シユムペーターとオツペンハイマーの靜態論

高橋次郎

序章

第一章 靜態的觀察法の略史

第二章 シユムペーターの靜態

第三章 オツペンハイマーの靜態

終章

## 序 章

十九世紀に入つて、獨逸に於ては、國民經濟的理論は多數の現實の現象を説明し得ないと言ふ事の認識が、周知の如く、汎ゆる理論的研究の完全なる斷念に導ひた。人々は、理論的認識一般の可能性を否定し、國民經濟的問題の觀念論的 "idiographischen" 觀察方法に向つた。

又、英米に於ては、人々は、古典派經濟學者の理論は一の補充を要し、斯くする事によつて其の結果は現實に對して妥當性を要求し得る、と知解した。だが、獨逸に於ける程急進的ではなかつた。人々は全理論を拋棄しなかつた、そして唯何等かの補充を目論まんと試みる事に甘じて居た。その目的は、獨逸に於けると同様に、現實への接近にあつた<sup>(1)</sup>。

人々は考へた、物理學に於ける『靜態』は、經濟學に於ける『平衡』價格、『正常』價格、『自然』價格と比較せられ得るであらう、と。物理學の靜態がその對象を靜的狀態に於て觀察すると同様に、古典派の經濟學者はその觀察に際して價格の形成及びその他の經濟的現象に参加する要素が其の觀察期間の間變化しないと云ふ假定を作り出した。而して、彼等は『經濟學の靜態』を研究した。クラークの言を借りると、「古典派經濟學者が價值、賃銀、及び利子の標準に關連して用ひて居る所の自然的と言ふ言葉は、無意識的に、靜態的と言ふ言葉に等しいものとして用ひられて居た<sup>(2)</sup>」のである。

物理學に『靜態』の外に『動態』がある様に、人々は『經濟靜態』の外に『經濟動態』を作成した。

元來、經濟靜態及び經濟動態なる概念は、經濟學が直接に物理學からとつて來たものではなく、

社會學からとつて來たものである。詳しく言ふと、此の概念を最初に社會的現象に關聯して使用したのはオウギユスト・コムトであつた。彼にあつては、靜態と動態とは分離せる二個の學問であつて、『社會的靜態』と言ふ言葉は社會秩序に對する名稱として、又『社會的動態』と言ふ言葉は進歩に對する名稱として、單に修辭的に使用せられて居たに過ぎなかつた。

スペンサーは、もつと科學的に、精密なる物理學的概念を把握して居た。彼にあつては、平衡に於ける社會的勢力の説明が社會的靜態なのであつた<sup>(3)</sup>。

社會學に於ける斯かる區別が、何の點まで可能であり、有効であるかと言ふ事は、此處では研究しない。又、此の概念が何の程度まで社會學の中に於て發展せられたかと言ふ事も研究しない。此處では唯、經濟學が此の概念を創り出した源泉が何處に在るかと言ふ事を明かにすれば足る。

靜態及動態なる表現は、コムトの友人ジョン・スチュアート・ミルによつて始めて、若き社會學から經濟學の中に導き入れられた。斯くて、吾々の觀察は經濟學に於ける靜態概念の發展の跡付をなす可き順序にあるのであるが、その前楮として經濟學發生當初にまで遡つてその研究方法の特質を略々明かにする事から始めなければならぬ。

(1) R. Streller, *Statik und Dynamik in der theoretischen Nationalökonomie*, s. I.

(2) J. B. Clark, The Distribution of Wealth, s. VI.

(3) Giddings, The Principles of Sociologie. p. 9.

## 第一章 靜態的觀察法の略史

吾々は、重商主義の中に、貨幣量と商品量との交換に關して、商業國の間に、國家權力の作用によつて必然的に作り出される靜的均衡状態があると云ふ考方の在るのを、見出す。斯かる根本觀念から、重商主義の貿易差額理論が發展させられた。又、一國の財貨の全量の價值と流通せる地金貨幣の量との必然的平衡状態の上に、彼の有名なる貨幣數量説が建てられた。然し、重商主義は、科學的と言ふよりは寧ろ實踐的なる方向をとつて居たので、其の理論は單に個々の學説の萌芽を含んで居たに過ぎなかつた<sup>(1)</sup>。而して、近く十八世紀に至るまで、貿易差額なる觀念は、ヨーロッパの政治的平衡なる姉妹觀念と密接なる關聯を保つて居た<sup>(2)</sup>。斯くの如く、重商主義に於ては、平衡を維持するための要素として『國家權力』があつたのであるが、重農主義及びその後の個人主義的經濟學に於ては、その國家權力が個人の自由並びに財産の保護の下に其の影をひそめ、その代りに

『自然的秩序』が顯現して來た。

(1) Schumpeter, Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung. s. 79.

(2) Karl Pribram, Die Entstehung der individualistischen Sozialphilosophie. s. 10.

## 二

自然哲學を出發點とする重農主義の思想内容を一個の體系にまで作り上げたのは、ケネーである。彼は、『經濟表』に於て、純生産物が社會の全階級の間規則的に分配せられる形像を描き、若しも全階級の養育のために必要なる純生産物が年々歳々繰り返して産出せられるならば、經濟的循環は規則的であり、従つて平衡状態が成立する、と説く。即ち、ケネーは直接に經濟的循環と言ふ大なる事實を擱んだ。「循環を記述する事は、乍然、事實上 (tunc facta) 靜態的經濟を記述する——即ち、如何にして、常に一定せる生産力が、その常道を、その規定に従つて、進行するかと言ふ事を記述する事である<sup>(1)</sup>。」

重農學派の平衡論の根本思想は、個人的營利衝動及び自由競争の下に於て作り出される『自然的平衡』である。

斯かる考へ方を以て、古い貿易差額理論及び貨幣數量説は、重農主義的、個人主義的思想家タツカー及びデキザイド・ヒュームの手によつて、興味ある變更が加へられた<sup>(2)</sup>。

(1) Schumpeter, Theorie d. w. E. s. 79.

(2) E. H. Vogel, Die Theorie des volkwirtschaftlichen Entwicklungsprozesses und das Krisenproblem. s. 106.

### 三

アダム・スミスは、汎ゆる材料を蒐集し、整理し、結合したけれども、嚴格なる分析をなす人ではなかつた。然し、彼の思索系行が確定せる構造を示す所では到る處に於て、彼の觀察方法は靜態的であつた。「彼の謂ふ所の自然價值及び自然價格は、靜態價值及び靜態價格である<sup>(1)</sup>。」従て、スミスの思想を研究すると、その經濟學的眞理は斯かる靜態的性質を帯びて居る事がわかる。彼は先づ第一に分業と言ふ社會的事實を論ずる。それは、それに續く交換理論並びにその交換理論の上に建てられた理論に對して礎石を與へんがためである。而して、最後に、純理論から脱出して、第三編に於て他の對象を取扱つて居るのである。

斯くの如く、靜態的觀察方法は、經濟學の成立と共に古いものであり、重農學派及び古典學派以

來その記述は主として靜態的法則に在つた。

然し乍ら、理論の核心が經濟靜態に在ると言ふ事は、スミス以後の學者に於て尙ほ一層鮮明になつた。殊にリカアドに於てさうである。

リカアドの業績は、理論の抽象的精確さの中に在る。彼によると、唯競争の平衡狀態に於てのみ、財貨の中に含まれて居る勞働の分量がその交換價值を決定するのである。斯かる平衡狀態の觀察の上に、リカアドの觀察方法の全體が据えられて居る。此の平衡狀態はたゞ與件の變動によつてのみ妨げられ、たゞ與件の變動のみが『進歩』と言ふ概念の下に觀察せられる<sup>(2)</sup>。リカアドは、現實世界から變化的事情を捨象し去り、完全なる自由競争を前提として、その上に成立する所の、正常的なる、自然的なる價格、賃銀及び利子等を研究した。リカアドの斯かる理論的世界は、明らかに靜態世界である。

ジエムス・ミルからケインズ及びニコルソンに至るリカアドの後繼者は、リカアドの經濟的靜態の完成に於て、彼等の仕事場を發見した。此の完成に於て、經濟學の靜態的特質の認識が愈々意識せられる様になつて來た。換言すると、靜態的研究方法なるものは經濟學の生誕と共に用ひられて來たものであるが、未だ『靜態』と言ふ言葉は何んの著作の中にも見出されなかつた。所が、ジヨ

ン・スチュアート・ミルが出て、始めて、靜態概念及び動態概念をコムトの社會學からとつて來て、經濟學の中に移入した。

(1) Schumpeter, Theorie d. w. E. s. 81.

(2) *ibidum.* s. 32—83.

#### 四

ジョン・スチュアート・ミルは、其の著作を二部に分ち、一を靜態、他を動態と名付けた。「前述の三部分(生産・分配・交換)は經濟學の靜態と呼ばれて居る所のものに就いて、吾々の制限の許す限りの詳細なる見解を包含して居る。吾々は經濟的事實の存する所を檢し、如何にして經濟的事實が原因結果の關係に立つかを検討した。斯くて、吾々は、同時に存在するものとして考察した所の經濟的現象に就いての集合的見解を得た。吾々は、經濟的事實の相互依存關係の法則を確立した。而して、諸要素の中の或るものゝ状態が知れた時には、吾々は又他の大多數の要素の同時的状态を推測する事が出来る。然し乍ら、これらの凡ては、たゞ吾々をして靜態的な不變なる社會に於ける經濟法則を得せしむるのみである。吾々は更に、吾々の平衡の理論に運動の理論——を即ち、

經濟學の靜態に動態を附加して、人類の經濟状態をば變動する傾向のあるものとして考察しなければならぬ<sup>(1)</sup>。」

斯くの如く、ミルは、靜態に於て、一方に於て停滯的な無變動の社會の經濟を取り扱ふと同時に、他方に於て同時的存在として觀たる諸種の經濟現象を取り扱ふ。従つて、彼は、共存せる諸要素の相互依存關係の概念から、必然的歸結として、一要素の狀態さへ明らかになれば、他の要素の同時的存在狀態は明らかに推測せられ得るものと考へて居たのである。

(1) J. S. Mill, Principles of Political Economy. p. 695.

## 五

上述のミルの立脚地を本質的に發展させ、靜態状態をば細心に定義し、それが成立の條件を深く研究したのは、クラークである。

クラークに従ふと、價值の自然的標準、賃銀・利子・利調の正常率は、事實上、靜態的である。社會を停止的狀態に歸せしめよ、産業をして全く自由に行はしめよ、労働と資本とをして絶對的に可動的ならしめよ(リカードの研究に現はれたる理論的世界に於て假定せられると同じ様に、事業

より事業に移動する事を自由ならしめよ)——然らば、自然的價値の領域が成立するであらう。此處にクラークの謂ふ自然的價値の領域は、即ち靜態的價値の平衡状態である。

「然れども、靜態状態は想像的なものである。凡て現實の社會は動的のものであつて、吾々の主として研究せんとする社會は特にさうである。靜態的社會を想像的に創り出す研究は、飽くまで理論的のものである。現實の社會に於て、不斷の變化は勞働と資本とを時折一業から他業に投げ出す。各産業に於て、生産の様式、財貨の種類及び數量は幾度となく變化する<sup>(1)</sup>。」然らば、斯かる動態的社會と靜態的社會との區別如何。

クラークの動態に於ては、

- (1) 人口は増加しつゝある。
- (2) 資本は増加しつゝある。
- (3) 生産方法は改良せられつゝある。
- (4) 産業經營の形式、即ち勞働及び資本を生産の目的のために組織する様式は、變化しつゝある。
- (5) 消費者の需要は、向上しつゝある。

以上の五種の一般的變化は何れも社會をして動態的ならしめる。従つて、斯かる變化の一切存在

しない社會が、靜態的社會である。即ち、明確に言ふと、人口増加せず、資本増加せず、生産方法變化せず、産業經營の形態變化せず、消費者の需要向上せずして、一定の均衡を保てる場合に、靜態は成立する<sup>(2)</sup>。即ち、五個の條件の一定と言ふ假定の下に、經濟生活が均衡を保てる姿態が靜態經濟であり、その攪亂及び變動は凡て動態經濟に屬する事となるのである。クラークの動態の認識對象は、現實界そのものである。

靜態動態の意識的區別を經濟學の領域に於て最初になしたのはジョン・スチユアート・ミルであつたけれども、クラークは、それを繼承し深く研究して本質的に發展させる事によつて、更に、より大なる貢獻をなしたのである。

(1) J. B. Clark, *Distribution of Wealth*, p. 30

(2) *ibid.*, pp. 56, 63, 279, 400, 401, J. B. Clark, *Essentials of Economics*, pp. 203—206,

## 六

「主觀價值說による理論上の大革命は、學說の基礎の靜態的特徴には觸れなかつた<sup>(1)</sup>。」オースタリー學派の學者達は、形式的には靜態概念に觸れる事なく、従つてそれに何等の重要さも置いて居

なかつたけれども、彼等も亦自然に經濟循環以外の何物をも記述して居ないのである。實際、彼等は意識的に靜態概念をばその前線に持ち來らしては居ないけれども、その所論の中には無意識的に靜態概念の表現せられて居るのを見る。二三の例を擧げると、カール・メンガーは『經濟原論』の中に於て、「一般的經濟事態に對應する價格<sup>(2)</sup>」と言ふ様な空虚な様式を以て満足して居る。又、自然的價值を力説するウキザーに於ける「所謂自然的價值とは、財貨の分量と効用との社會的關係が齎らす所の價值、即ち共產主義の社會に於ける價值である<sup>(3)</sup>。」而して、彼は、又、何等の規定をもなさずに「靜止狀態の中に於て見出される市場<sup>(4)</sup>」等と述べて居る。最後に、最も靜態的な記述をなして居るレオン・ワルラスの一句を引用する。「完全にして一般的なる市場の平衡は、二個の任意なる商品の敵對的價格が、その中の一商品と任意の第三の一商品との價格の割合が等しい時に於てのみ成立する<sup>(5)</sup>。」

- (1) Schumpeter, *Entwicklung*, s. 86.
- (2) C. Menger, *Grundsätze der pol. Ökonomik*, s. 240.
- (3) Wieser, *Der natürliche Wert*, s. 59.
- (4) do., *Theorie der Sozialökonomie*, s. 272
- (5) Léon Walras, *Mathematische Theorie der Preisbestimmung der wirtschaftlichen Güter*, s. 29.

經濟學に於ける靜態概念の發展史上に於て、最も重要な地位を占めて居るのは、シユムペーターである。而して、シユムペーターに負ふ所極めて多きにも拘らず、尙ほその所説に満足する事能はずして、自ら一個の見解を創出せるものにオツペンハイアーがある。私は、更に進んで、此の二人の靜態概念を稍々詳しく検討せんとする本來の意圖を實現するの試みに入る事とする。

## 第二章 シユムペーターの靜態

シユムペーターの靜態概念は、交換即ち財貨の分量關係以外の何物をも包含して居ない。斯かる認識對象に於ては、靜態は先づ第一に經濟を營んで居る人間から抽象せられる。「吾々は、一般に、取引をして居る人間を觀察しようとは思はない。唯それ等の人々が所有して居る所の財貨の分量を見ようと思ふのみである。吾々は、その變動、即ち正しく言ふとその變動の一定の種類のみを記述

しようと思ふ(1)。」

暫らくシユムペーターの言に耳を傾ける。

「吾々は、國民經濟を見廻す時、各經濟主體が一定の貨財の一定分量を所持して居るのを發見する。凡ての是等の分量——それを、吾々は、簡單に『經濟的數量』と名付けたい——は、一方の變化が他方の變化を伴ふと言ふ方法に於て、相互依存關係に立つて居ると言ふ事の認識が、吾々の原理の基礎に横たはつて居る。此の事は、極めて手近にある簡單なる經驗的事實であるから、殆んど説明を要しない。吾々は、是等の數量が一組織の要素を形成すると言ふ事によつて、此の事實を表現しようと思ふ。是等の數量が、恣意的に或は偶然に或は其他種々様々に人が稱する様に、組合せられて居て、人々が如何なる意味をそれに結び付け様とも、個々物自體は決して偶然的でもなく、又孤立的でもないのである。

今や、吾々は、是等の數量が、その中の一或は二三のもの、一定の大きさに、他のもの、一定の大きさのみが相應する様な一結合の中に立つて居るのを見出す時には、吾々は此の組織を一義的に限定せられて居ると稱する。此處では、『應ずる』と言ふ事によつて、吾々は與へられない數量の大きさが自ら成立せんと努める事、並びにそれが一度成立するや、組織に於けるそれ以上の變動の傾向は

缺けて居ると言ふ事、を意味する。吾々は、此の状態をば均衡状態と名付ける。此の状態に於ける個々の數量をば、吾々は、正常的又は自然的と名付ける。

茲に於て、吾々の課題は、一國民經濟の或る状態が與へられて居る時、豫想せざる事の生ぜざる限り、次の瞬間に生ずる數量の變化を導き出す事である。此の導き出しを稱して、吾々は、『説明』と言ふ。それは、力の依存關係の記述によつて實行せられる。その結果、吾々の課題は、吾々の組織及びその運動傾向の記述として定義せられ得るであらう。思惟系行の道行に於いて、他の學問の實質的命題に依存する事なくして、此の課題が一義的に可能である時には、經濟學の自己封鎖的理論が存在する。記述が依つて以て成立する所の命題をば、若しもそれが充分なる重要さをもつならば、吾々は『經濟的法則』と稱する。その總體が『純經濟學』又は『理論經濟學』の原理を構成する<sup>(2)</sup>。」

シユムペーターに従ふと、靜態的理論の課題は、與へられたる經濟的數量に於て、平衡状態（その上で市場が活動する所の）を確立するに在る。經濟的數量は與へられて居なければならぬ。即ち、變動せざるものとして與へられて居なければならぬ。所が、經濟的數量が變動すると、既に出現して居た平衡状態は失はれる。シユムペーターは『平衡状態』とは、組織の中に於て變動に對

する傾向が缺除して居る状態であると解して居る。換言すると、各需要者が「各財貨をば同一強度の汎ゆる慾望の最終に得られる部分數量が充足せられる様な數量に於て得られる<sup>(3)</sup>」時に、平衡状態が到達せられるのである。彼が此處で『需要』と言ふのは、又『供給』をも意味するものである、蓋し、需要と供給とは二個の同種の現象なのであるから。「斯くて、それは、二つに割れる所の二個の需要曲線であつて、一需要曲線と本質的に異なる一供給曲線とではないのである<sup>(4)</sup>。」斯くて、與へられたる價值函數及び財貨數量に於ける二個の需要曲線の切斷點が何處に在るか、と言ふ事を確立するのが、靜態理論の課題である。

上述せる所によつて明かなるが如く、シユムペーターは組織に於ける要素間の函數的關係を、出来るだけ普遍的なる方式を以て記述する事を以て目的とするものである。故に曰く、「價值函數は我々の問題の必須なる事實であるから、靜態的狀態に於て、吾々はその價值函數を一定と考へなければならぬ。新しい生産に對する不意打或は増進は、吾々の組織を根本的に變更させるものであるから、斯様な事の生ずるは許されない。凡ての生産の結合、並びに消費の結合は、凡ての場合に於て、一定して居なければならぬ。生産結合及び消費結合は、欲望、資本、圍繞せる自然等と言ふ様な事實の凡ての如く、價值函數に反映する。吾々は、凡ての交換活動も亦、前以て觀察せら

れ、價值函數の組織は、それによつて調節せられなければならないと言ふ事を附け加へて置けば、それで充分である(5)。」

既に述べたるが如く、經濟學の課題は、經濟的數量の平衡状態——並びにその一定の變動——を記述するに在るのであるが、斯様な平衡状態に於ては、吾々は「變動の表示を唯一の目的とする吾々の價值函數に、これ以上の變動に對して、零の大きさを與へなければならぬ(6)。」而して、微分學は吾々に、變動の程度を示す所の微分商が零に等しい時、即ち消滅する時、或る函數——それは經濟學に於ては價值函數である——は極大値をとる、と言ふ事を教える。即ち、「經濟的數量の變動の休止と函數の極大とは同義であり、平衡状態は前者によつても後者によつても同様に特徴付けられるものである。吾々は、それを前者に於ては休止状態として、後者に於ては極大状態として、示す事が出来る。此の二つの表現は同義である。これは吾々の原理である。これから述べる事は凡て、たゞその解明にのみ役立つ(7)。」

極大公理の内容は、平衡状態に於てはこれ以上の變動の起る傾向が少しも存在しないと言ふ法則以外の何物でもない。此の法則が理論の中に於て演ずる役割は、實に、平衡状態を定義し、然る後に平衡の支配する所には必然的に生ずべき價格の確立を助ける事である。

- (1) Schumpeter, Wesen und Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie. s. 86.
- (2) *ibid.*, s. 28—29.
- (3) *ibid.*, s. 131.
- (4) *ibid.*, s. 235.
- (5) *ibid.*, s. 255.
- (6) *ibid.*, s. 198.
- (7) *ibid.*, s. 199.

二

吾々は、一方に於て、シユムペーターに於ける靜態の認識對象が餘りにも抽象的であり、餘りにも狭少なる内容を有して居ると考へ得るならば、それと共に、他方に於て、それは極めて精細に規定せられて居ると言ふ事を認めなければならぬ。彼は、靜態の定義に際して、常に經驗的なる經濟を證明しない。彼の體系は、全く彼の虚構——即ち、凡ての經濟的數量は、一物の變動が他の汎ゆる物の變動を伴ふと言ふ様な方法で、相互に依存關係に立つて居ると言ふ假定から展開せられて居る。

而して、シユムペーターには、彼が研究を押し進めて行く中に、自分で規定した狹隘なる領域を

跳び越へて同一認識對象の下に留つて居なかつたり、又彼の狭小なる認識對象を側らにおしやつて、直接に經驗的對象に眼を轉じたりする誤謬を犯して居るのぢやないかと思はれる節々もある(1)。

シユムペーターの靜態に於ては、企業家利潤及び資本利子の問題は解き得られない。そこで、是等の問題の解決をば動態に分與して居る。然し乍ら、何が動態であるかと言ふ事に就いては漠然として居て、ただ僅かに神秘的なる表現を與へて居るに過ぎない。彼は言ふ、「動態は、如何なる關係に於ても、方法論的にも、内容的にも、靜態とは全然異別なるものである(2)。「靜態と動態とは全く異別なる領域であつて、それは、常に異別なる問題を取扱ふのみならず、又異別なる方法及び異別なる材料に關係するものである。それは、同一の理論的建築物の二個の章ではなくして、二個の完全に獨立せる建造物である。動態は今尙ほ初期に在つて、『未來の地である(3)。「何が動態に對立する靜態の嚴密なる限界であるか？それに對して一般的解答を與へ、絶對的に強固なる規準を與へる事を、吾々は躊躇する(4)。」形式的に言ふと、シユムペーターの動態は、より、少くない抽象度を有する普遍概念である。彼は、靜態との區別として、特に企業家・銀行家・資本家・地主・労働者としての經濟的性質を有する人間を動態の中に包含して居る。是等の人間は二群に分れる。即ち、享樂型即ち靜態型と、勢力型即ち動態型とに分れる。企業家は後者に所屬し、その他の汎ゆる經濟

主體は第一のものに所屬する。斯くの如くシユムペーターの動態に於ける人間概念は、その抽象度は餘り強くもないが、極めて強烈なる個別的色彩を帯びて居るものであるから、斯かる人間概念の助けを藉りて理論を構成し得るや否やは疑問であると言はなければならぬ。

- (1) Streller, Statik und Dynamik. s. 86—87.
- (2) Schumpeter, Wesen. s. XLX.
- (3) *ibid.*, s. 182.
- (4) *ibid.*, s. 184.

三

シユムペーターは、殆んど全く個人經濟的な平衡状態の研究に停滯して居る。舊學説は個人經濟の靜態には殆んど全く係はらなかつた。そして、需要と供給とは一定せるものと假定する事によつて、個人經濟的與件をば與へられたるものとして、満足して居たのであるが、主觀價值學説は、此の點に於て多くのものを齎らした。主觀學説は、各經濟人は、技術的に可能なる限り、又凡ての分割し得る『貯財』に於て、凡ての限界効用が同一大さである限りに於て、勞働生産物の供給を調節する——而して、他面、彼等の營利勞働は、最後の減少分の『不効用』が最後の増加分の『効用』

と同一の大きさになるまで、擴延すると言ふ事を示す事によつて、事實上靜態的觀察方法を用ひて居たのである。斯くて、個人經濟的靜態の基礎付は既に錨を下されて居たのであるが、其の錨を尙ほ一層深く下したのがシユムペーターである。

シユムペーターに従ふと、一定の自然的・技術的・社會組織的條件は與件として與へられ、その上に於て經濟的數量の變化が休止し、價值函數が極大となつて居る時に於て始めて、平衡狀態が成立するのである。是の事を數學的に表現して曰く。

「財貨の數量の増加が限界點に於て消滅すると言ふ事は、此の數量に關する吾々の函數の微分商が零に等しくなければならぬと言ふ事の謂である。吾々が凡ての財貨を同一單位を以て、例へば貨幣を以て、測定し、 $q_a, q_b, q_c,$  等を財貨  $A, B, C,$  等の數量とするならば、吾々は次の方程式を得る。

$$\frac{d\phi}{dq_a} dq_a + \frac{d\phi}{dq_b} dq_b + \frac{d\phi}{dq_c} dq_c + \dots = \phi \dots (1)$$

此の函數 $\phi$ は、吾々の經濟主體の財貨所有の總價值函數の一種類なるに外ならない。そして、此の方程式は、均衡狀態及び極大狀態を表はす。此の助力によつて、吾々は、個人が均衡に於て所有する財貨の數量間の關係を知る。特に販賣せられた財貨の價額と購買せられた財貨の價額とは同一で

なければならぬから、個々の種類の財貨の單位の價格を夫々  $p_a, p_b, p_c, \dots$  等を以て示すと、次の方程式を得る。

$$p_a dq_a + p_b dq_b + p_c dq_c + \dots = \phi \dots \dots \dots (II)$$

此の方程式と第一の方程式とを結び付ける事によつて、次の方程式を得る。

$$\frac{1}{p_a} \frac{dq}{dq_a} = \frac{1}{p_b} \frac{dq}{dq_b} = \frac{1}{p_c} \frac{dq}{dq_c} \dots \dots \dots (III)$$

此の方程式が限界効用均等の法則を表はす<sup>(1)</sup>。」

同一の事を心理學的に表現すると、各財貨は最終に得られたる部分數量が凡て一樣なる強度の欲望を充足せしむる様な數量に於て得られると言ふ事になる。曰く、「諸方程式の帶は、個人の經濟的權力範圍を限定する。吾々は、それを圓周と考へる事が出来る。そして、その圓の中心に各經濟主體が立ち、その圓周の上に財貨の價値の限界點が落ちる。此の點は凡て、個人にとつては等距離に在る。心理學的に言ふと、同一割合で表はされた限界量は凡て、個人にとつては、同一價値を有する。それ故に、彼は最早他の財貨の等量の増加に對して、その限界量の如何なるものをも與へる事を欲しないのである。そして、然らざる場合には常に經濟的交換が發生し得るのである。而して、此の事が——しかも此の事のみが——平衡狀態に於て個人が欲望満足の最高限に達する事を證

明するものである(2)。」

是は全く個人經濟の靜態である。是は、限界効用說そのものとしては、誠に立派なものである。けれども、個人經濟の靜態から進出して、超個人的靜態即ち社會經濟的靜態への推移に於ては成功して居ない。此の仕事は、如何なる限界効用論者にも恵れて居ない、否恵まれる事が出来ないものである。此の點に於ては、シユムペーターと雖も亦同様の難點に苦しんで居る。即ち曰く、「吾々の限界効用均等の法則と吾々の平衡狀態とは、孤立人たると他人との關係に立つものたるを問はず、汎ゆる經濟主體に妥當する。個人の財貨獲得の限界點は常に相關々係に立つ。ただ第二の場合には、此の限界點は又他の汎ゆる個人の財貨獲得の類似の限界點にも依存すると言ふ事が、附け加へられる。斯くして、吾々は、躊躇する事なく前進する事が出来る。そして、國民經濟に對しても亦、一義的に決定せられた限界効用の均等を承認する事が出来るのである(3)。」と。此の言によれば、シユムペーターは、明らかに、國民經濟的のものへと暗中模索をして居るのである。けれどもそれは單なる模索に止つて居ると言はざるを得ない。オープンハイマーの強調するが如く、「全個人經濟の全平衡狀態を加算しても、ただそれ丈では或る他の市場經濟の靜態は生じて來ないのである(4)。」その結果、斯かる個人經濟的靜態から出發しては、到底社會經濟的靜態への架橋を爲し得

ない事を知る。而して、社會經濟的靜態への架橋をなし得ない理論は、極めて不満足なものである。蓋し、吾が經濟學の對象は、一定の歴史的時期に於ける人と人との間に於ける社會的なる經濟關係(此の關係が現象形態としては物と物との關係として現はれる)に存し、主觀學說の取扱ふが如き物と人との間の個人的經濟關係には存しないのである。後者は、個人經濟と言ふ小さな問題の對象とはなり得るが、決して經濟學の唯一真正の對象たるの權利を主張し得ないものである。

- (1) Schumpeter, Wesen, s. 130—131
- (2) *ibid.*, s. 132.
- (3) *ibid.*, s. 133
- (4) Oppenheimer, Wert u. Kapitalprofit. 2. Aufl. s. 31.

### 第三章 オツペンハイマーの靜態

—

オツペンハイマーは、シユムペーターが靜態をば平衡狀態と規定する事、及び組織に於ける要素間の函數的關係を普遍的なる方式を以て表現する事に(但し、それを『市場』經濟學に於て使用す

る限りに於て)對しては、同意を表し(1)、その影響をうける事が極めて甚大である。けれども、市場に於ける經濟現象に眼を投ずるオツペンハイマーは、シユムペーターの個人經濟的靜態には大なる不滿を感じ、個人經濟的靜態とは無關係に(2)、『市場』經濟的靜態を研究した。

オツペンハイマーに従ふと、市場經濟の靜態も亦諸方程式の帶によつて一義的に正確に平衡狀態として規定せられる。平衡狀態に於ては、最早何等の變動の餘地なく、社會は全體として欲望充足の最大限に到達する。即ち微分商は消滅して、函數は極大値をとるのである。斯くの如く、個人からではなく、全體から出發しなければならぬ。さうすると、直ちに、市場經濟は、個人經濟に於けるが如く、一義的に規定せられた平衡狀態へと傾向する事を知る。「市場經濟的過程、即ち競争は、全所得の平均へと傾向する。市場經濟の平衡狀態は、個人經濟のそれとは、その全機構に於て全く異つて居るものであつて、客觀的の力によつて支配せられて居る。そして、純客觀的價值論に導くものである。之に反して、個人經濟に於ては、主觀的價值評價が主要なる役割を演じて居る——勿論それが單獨に作用して居るのではないが(3)。」

(1) Oppenheimer, Wert u. Kapitalprofit. 2. Aufl. s. 28 u. 29.

(2) Ibid., s. 31.

(3) Ibid., s. 32.

二

オツペンハイマーは考へる、「靜態的觀察は、一組織の運動を規制する法則を發見するための方  
法である。それは、諸現象の確立に役立つものではなく、諸現象の解明に役立つものである。それ  
は、規則的に、次の様な先驗的説明に由來するものである。即ち、諸々の力が常に敵對的に作用し  
合ふ所に於ては、諸々の力は、そが相互に平均する状態へと傾向する。その結果、かゝる前提の下  
に於ては、組織の外來的障害即ち與件の變動は止み、全組織は、恰も水の面の如くに完全なる休止  
をなして居るか、或は又恰も遊星系統に於けるが如く全く一定せる方法を以て全體として運動して  
居るのである(1)。」と。而して、オツペンハイマーの『市場經濟』も亦、相反する諸々の力の一組  
織である。市場經濟は、個人的立場から見ると、競争以外の何物でもないが、全體的立場から見る  
と、分業及び協業以外の何物でもない。オツペンハイマーの關心を有するのは、唯一つの見地のみ  
である。即ち、競争の中に於て作用し合つて居る相反する諸々の力、換言すると、現實的需要を求  
むる賣手と現實的供給を求むる買手との競争に基因する所の、社會成員の經濟的行動の總稱が、そ  
れである。此の闘争は、とりも直さず、價格闘争である(2)。

此の價格鬭争の行はれる經濟的場所が、即ち『市場』である。市場に於ける「平衡状態は、正確に規定され得る全生産物相互間の價格關係によつて、一義的に、一組織として決定せられる<sup>(3)</sup>」ものであつて、此の靜態に於ける各生産物の價格を古典派の學者は『價值』と命名したが、オツペンハイマーはそれを『靜態價格』と命名する。

價格鬭争が斯かる靜態を形成するに至る過程を簡單に説明する。同時的存在の諸市場の場所的結合關係に於ては、『無差別の法則』によつて、同種の生産物は等しい價格を有する傾がある。何となれば、凡ての生産者は、如何なる市場に自分の生産物を齎すべきかを考へ、有利なるを求め、不利なるを避けるがために、有利なる場合には供給が需要を超過して價格が下落し、反對の關係の場合には價格が上騰するからである。乍然、繼起的諸市場の時間的結合關係に於ては、異種の生産物の價格は平均する傾向がある。何者、各生産者は、次の市場に如何なる生産物を齎す可きかを商量し、不利なる生産物の生産を廢止又は制限し、有利なる生産を新たに興すか又はそれを擴張するからである<sup>(4)</sup>。斯くて、市場が此の平均的水準、即ち一般的價值關係に到達したと考へられる時には、それは、その中に於て生産物の現存價格がその生産者に對してその生産を制限したり擴張したりする機因を與へない様な價格關係として表はれる。以上は、靜態的價格關係は如何にして成立

するかと言ふ事の記述である。

「人々は屢々競争は價格を平均する傾向を有すると言ふ。けれども、それは部分的眞理たるに過ぎない。競争は單に同一市場に於て同一價格を有する同一商品の生産者間に於て價格を平均する傾向を有するのみである。乍然、靜態價格の問題は、正に一生産物の價格を他の生産物を以て表はすと如何になるかと言ふ事であるから、此處では競争が價格を平均する傾向を有するとは言ひ得ない(5)。」とオツペンハイマーは主張する。例へば、六グラムの金が一〇〇立のベンゼン又は六〇米のキャラコ又は一〇〇〇キロワットの電力又は二〇時間の左官労働等と等價であるならば、その時には如何なる平衡が得られるであらうか？

「否、吾々は、既に、競争は價格を平均するものではなくして、所得を均等にする傾向を有するものである、と言ふ事を述べた(6)。」例へば、パン屋にても鍛冶屋にてもなり得る少年が職業撰擇に際して、その少年が鍛冶屋にならうと決心するのは、鍛冶屋が一個の蹄鐵に對して一マルクを得、パン屋が一塊のパンに對して二分の一マルクを得るからではなく、寧ろ鍛冶屋がパン屋よりもより良い生活を營んで居るのを知つて居るからである。又、同様に、百萬圓を以て商賣を始める資本家も、費用の嵩む商品例へば自動車やピアノを生産するよりも、安い商品例へば鉛筆やマツチを生産

する方がより多くの所得が得られると確信する時には、安い商品の生産を撰ぶであらう。

アダム・スミスは曰ふ、「同一地方に於て、何等かの業務が他より有利であり又は不利である時には、有利なる場合には多くのものが流入し、不利なる場合には多くのものが流出し、その結果間もなく、その利益は他の業務の利益と一致するに至るであらう。此の事は、尠くとも、事物が自然の成行に放任せられ、完全なる自由が支配し、各人が自由にして自己に適する様に見える仕事を任意に撰擇し得る社會に於て起るであらう」と。斯くの如く、何等の獨占的關係の作用も存しない所では、勞働力の相對的資格に一致する限りに於て、實際に、自由競争が所得をば繼續的に且つ平均的に均等ならしむる。従つて、「競争は、同一性質の力の同一の努力に對してのみ、同一の所得を獲る事を可能ならしむる<sup>(8)</sup>。」ところが、競争の自由でない所、即ち或る種の獨占關係の作用して居る所に於ては、斯かる所得の均等は決して到達せられ得ない。即ち、種々なる『制限』をうける。

抑々市場に於ける所得は、生産物の賣却によつて得る利得、即ち其の原費と價格との差額から成る。その結果、價格關係の競争は、凡ての價格が相互に凡ての生産者に其の『個人的資格』並びに『獨占的地位』（此の二つのものは、オツペンハイマーの所謂『制限』である。）に相應する所得

を獲しむる様な價格關係に立つ時には、靜止點に來る事となるのである<sup>(9)</sup>。斯く思考するが故に、オツペンハイマーは、極限概念としての『平等の社會』を假構して其處に生ずる靜態價格を第一に研究し、然る後に先天的並びに後天的なる『個人的資格』を挿入してその靜態價格を修正し、更に又種々なる『獨占的地位』を拉し來つてそれに大なる修正を加へて、現實への接近を試みて居るのである。

× ×

オツペンハイマーに於ける「市場經濟の靜態は、平衡狀態に於て職務を遂行して居る所の、發展せる經濟、即ち市場を中心にして集中して居る經濟社會の經濟である。それは、休止の狀態ではなく、運動の狀態であり、又觀察期間の間に於て少しも與件の變動による妨害に遭遇する事のない豊かなる函數である<sup>(10)</sup>。」人々は、靜態をば、動的平衡に於て休止して居る水量に喩へる。その水面は、完全なる鏡面、完全なる球面を表はして居る。しかし、動的平衡に於ける水面は正に休止して居るものであるから、此の比喩は不適當である、と考へるオツペンハイマーは、次の様に述べて居る。「より、良い比喩は、天體の動的平衡である。即ち、天體は規則的に運動する、しかしその相互の地位は少しも變動しない。尙ほ是よりも適切な比喩は、列車の運轉系統である。靜態は運轉時間

表に一致する所の列車の運轉であり、その時間表と違ふ運轉は『故障』として動態に屬する。人々が、時を異にする二個の汽車時間表を、その故障を除外して、比較する時には、『比較靜態』を得る<sup>(11)</sup>。』

オツペンハイマーの靜態に於て與へられて居る與件は、「人口の數及びその社會的地位、從つて集合的需要、從つて社會的分業及び協業の段階、從つて下位價値物（勞働生産物）の生産及び分配の一定<sup>(12)</sup>」せる事である。斯かる靜態的社會に於ては、生死は全體として平均せられ、人口の老若男女の別は正確に同一でなければならぬ。資本家的經濟社會に於ては、尙ほ此の外に、死亡、老廢、疾病等のために引退する資本家・地主・勞働者は、その瞬間に、自分と同一階級に屬する他の人によつて代位せられなければならない。

- (1) Oppenheimer, Wert u. Kapitalprofit. 3. Aufl. s. 2—3.
- (2) *ibid.*, s. 5—6.
- (3) Oppenheimer, Wert u. Kapitalprofit. 2. Aufl. s. 33
- (4) *do.*, Theorie der reinen und politischen Ökonomie. s. 369—372.
- (5) Oppenheimer, Wert u. Kapitalprofit. 2. Aufl. s. 34.
- (6) *ibid.*, s. 34.
- (7) A. Smith, Wealth of Nations, Vol. I. p. 101.

- (8) Oppenheimer, Wert und Kapitalprof. 2. Aufl. s. 35.
- (9) *ibid.*, s. 36.
- (10) *ibid.*, s. 42.
- (11) *ibid.*, s. 43.
- (12) *ibid.*, s. 43.

三

オツペンハイマーは、經濟學をも亦社會學に屬せしめて居るから、嚴密に謂ふと彼の靜態概念は社會學の靜態概念である。しかし、事實、それは上述の諸經濟學者の靜態と解して居るものと同一であるから、彼の説明は經濟學者にとつても亦興味あるものである。

オツペンハイマーはギデイングス(註)の後を追つて、Dynamik, Statik, Kinetik を區別した。しかし、此の三概念は、同一段階に位するものではなくして、Dynamik は Statik と Kinetik とを包攝し、Statik と Kinetik とが相集つて Dynamik を發生せしめるのである(註)。

(註) ギデイングスは次の様に述べて居る。「Dynamics は物理學と同延てあつて、その一部内ではない。それは、運動及び抵抗に關する汎ゆる研究を包含して居る。Statics は dynamics の一部内であつて、それと同位に在るものではない。それは、率及び方向に於て變動する事のない運動及び抵抗に關する汎ゆる研究、従つて又變動しないと思はれる機能並びに構造に

關する汎ゆる研究を包含して居る。dynamics のもつ一つの部内は Kinetics である。それは、率又は方向、或ひはその兩者に於て機動する運動に關する汎ゆる研究、従つて又機能並びに構造の修正・變動及び變遷に關する汎ゆる研究を包含して居る。」(Giddings, Principles of Sociology. p. 58.) 而して、「眼指す所は、static and kinetic principles の synthesis である。此の綜合が得られるまでは、進化的現象に關する具體的科學の dynamic theory は不完全なものである。」(ibid., p. 60.)

オツペンハイマーの Statik は、クラーク若しくはシユムペーターに於けると同一の問題、即ち平衡状態の確立と言ふ問題を持つて居る。彼は、斯かる平衡状態をば『動態的』と名付けた。と言ふのは、彼の靜態は單に動態の一下位部分たるに過ぎないのであるから、靜態的平衡状態と動態的平衡状態とは結局同一のものとなるのである。固より「靜態と動態とは、同一經驗對象から生ずる二個の異別なき抽象度である<sup>(2)</sup>」から、上に述べた様なオツペンハイマーの見解が生ずるのは當然の事である。蓋し、下層の概念、下位の抽象度、即ち動態の中には、上層の概念、上位の抽象度、即ち靜態の中に於けると同一の概念内容の存する事は、論理的に必然な事である。

次に、彼の Kinetik は與件の一定の探られて居ない經濟である。而して Kinetik の理論は、斯かる條件の下に於て經濟的現象を記述しなければならぬ。「Statik は汎ゆる與件が變動する事なく同一であると言ふ前提の下に於ける Funktion であり、Kinetik は與件が變動すると言ふ前提の下

に於ける Funktion である<sup>(3)</sup>。」斯くて、オツペンハイマーは、同一の對象に就いて二個の『状態』を持つ事となり、而して、Statik 及び Kinetik の理論は、此の二個の状態を研究しなければならぬのである。

斯くて、彼が Dynamik と名付けて居る所のものは、上述の Statik 及び Kinetik の綜合に外ならぬ。即ち、Statik 及び Kinetik は、Dynamik の下に屬する概念であつて、決してそれと同位にあるものではないのである<sup>(4)</sup>。是は全く前述のギディングスの見解を踏襲せるものに外ならない。オツペンハイマーの言ふ所を聽くと、「觀察は、Dynamik 即ち説明せらるべき眞實の全過程から發足して Statik に到達する。そして、そこから Kinetik に行く。斯くて、最後に、是等二個の計算によつて、Dynamik をば全體として説明する事が出来るのである<sup>(5)</sup>。」

斯くの如く、Statik と Kinetik との綜合が Dynamik であると言ふオツペンハイマーの考には、論理的には抗議の餘地がない。自然科学たる力學(Dynamik)は、靜力學(Statik)と動力學(Kinetik)との綜合である。けれども、オツペンハイマーの名稱付與が適切なりや否やに就いては疑問をさしはさむ餘地が大いにある。第一にオツペンハイマーの Dynamik と言ふ術語は『社會學』なる名稱の代りに用ひられたものであるが、それは不要である。『眞實の全過程』即ち Dynamik (オツペン

ハーマーに於ける)は、研究の對象となつて居る所の『説明せらる可き眞實の全過程』を特質付ける所の名稱、例へば社會學者たるオツペンハイマーに在つては『社會學』、經濟學者に在つては『經濟學』なる名稱を以て表現せられなければならない。第二に、Kineticなる名稱を廢止して、それに代る Dynamikなる名稱を以てするならば、オツペンハイマーの考へ方も、從來の經濟學者の靜態 (Statik) 動態 (Dynamik) 概念と殆んど異なる所がない事を發見するであらう。

- (1) Oppenheimer, System der Soziologie, I Halbbd. des I Bds. s. 71 ff.
- (2) Steller, Statik u. Dynamik, s. 134.
- (3) Oppenheimer, a. a. O. s. 74.
- (4) ibid., s. 71.
- (5) ibid., s. 75.

## 終 章

シユムペーターの言ふ所によると、靜態的觀察法から出發する事は、本道から甚しくかけ離れたものではないが、「たゞ、靜態の限界及び個々の特徴に關しては、今尙ほ疑問の發生し得る餘地がある<sup>(1)</sup>」のである。吾々の記述する所のものは、簡單なものから複雑なものへ、抽象から具體へ、

即ち、種々の諸規定の捨象せられて居るものから次第にそれらの規定を具備するところの具體的なものへと、一步步々向上する事によつて、表面的なる現象形態に、即ち『現實』に接近して行くものでなければならぬ。然らば、シユムペーター及びオツペンハイマーの靜態概念は、果して良く斯かる任務を遂行するための補助手段となり得るであらうか。

シユムペーターの靜態も、従つて又オツペンハイマーの靜態も、事實上、クラーク其の他のそれと相異るところが尠くない。唯、シユムペーターは、極めて觀念論的に、驚く可き論理の精緻を以て、靜態を規定した。けれども、結局、彼の靜態は個人經濟的のものに停滯して居た。その點に於て、彼は先づ致命傷を蒙らざるを得ない。それは、主觀學派共通の悩みである。

「彼等は、經濟そのものを彼等の視野から除外する事によつて、經濟事象の理論を建設せんと試みたのであつた。經濟的又は社會的關係をばその出發點とせず、彼等は、出發點として、人間と事物との間に於ける個人的關係を撰んだ。

彼等は、此の個人的關係をば、心理學の見解からして、自然的にして且つ不變的な法則に従ふ所の關係として認める。

彼等は、その社會的限定性に於ける生産を無視する。そして、經濟事象の法則的進化の觀念は、

彼等の想ひ到らざる所である。

斯かる經濟理論は、經濟學の撤廢を意味する<sup>(2)</sup>。」

斯くて、主觀學派は『經濟學の自殺』を遂行したものと謂はれても致方がないであらう。

此の點に關しては、社會的經濟關係に重きを置くオツペンハイマーの採つた方向の方が正しい、と言はれなければならぬ。然れども、それは方向に於て正しいのみであつて、オツペンハイマーの靜態概念も、シユムペーター其他のそれと同じ様に、尙ほ先驗的性質を有する一の虚構たるに止まる。彼等の先驗的に規定せる靜態の姿は、一の觀念論的產物に外ならない。それは、徹底せる論理的過程ではあるが、たゞそれ丈けに止まり、大切なる歴史的過程を全然無視して居る。そこに、吾々は、根本的なる致命傷を見る。

吾が經濟學の研究對象となるものは、歴史的に限定せられたる外的經濟現象と言ふ『事實』、即ちオツペンハイマーの所謂『眞實の全過程』である。既に、事實が與へられて居るならば、それを『抽象力』によつて分析する。此の分析は、統一的なる『現實』を分解して、その矛盾に滿ちたる構成分子を認識せんとする辨證法的特徴を有するものである。即ち、「研究とは、材料を瑣末に至るまで占有し、その材料の種々なる發展形態を分析し、その形態の内的紐帶を探し出すことであ

る。此の仕事が完成した後、はじめて現實の運動は適應的に叙述され得る、斯かる叙述が成し遂げられ、今や材料の生命が觀念的に反映して來る様になれば、それは如何にも先驗的構成を以て爲されたものゝ様に見えるかも知れない(3)。」しかし、それは、決して先驗的なものではない。叙述の外的形式から判断すると、それは觀念論的に見えるであらうが、「勿論、叙述の方法は、形式的には、研究方法と區別せられなければならないものである(4)」から、その研究方法に着目すると、それは實在論的のものであつて、決して觀念論的のものではないのである。斯かる研究方法を詳論する事は、此の論文の範圍外に横はり、別箇の研究に譲らる可きものである。

- (1) Schumpeter, Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung. s. 86.
- (2) Hilferding, Böhm-Bawerks criticism of Marx. pp. 79—80.
- (3) K. Marx, Das Kapital. I Bd. s. XVII.
- (4) do., s. XVII.